

Loevinger の自我発達理論についての 日本における研究動向

The trend of studies concerning Loevinger's Ego Development theory in Japan

大野 和男

Kazuo OHNO

Abstract

It has been more than 20 years since Loevinger proposed ego development theory. Up to now, more than 300 researches are conducted. WUSCT (Washington University Sentence Completion Test) is used to measure ego development. The manual to rate it was published in 1970, and then revised in 1996. Loevinger's ego development theory and its assessment have been translated into at least 11 languages. They were translated into Japanese in 1977 for the first time.

First, this study summarized Loevinger's ego development theory. Secondly, methodology of the rating was surveyed and focused on its issues. Thirdly, the researches which conducted WUSCT in languages other than English were reviewed and suggested attentions in the case. Fourthly, the researches in Japan were reported and discussed about untouched issues.

keywords : ego development, WUSCT, Loevinger, cross-cultural study

1. Loevinger による自我発達の概要

1.1 Loevinger による自我の定義

Loevinger が1976年に“Ego Development: Conceptions and Theories”を著して、20年余が経過し、現在までに関連する様々な研究が行われてきた。

自我は、精神分析の領域では、衝動表出に対立する課題解決の動きの集合と捉えられることが多い。「自我発達」という語は、①個人内の特性の発達のコース、②構成概念の歴史、③人間の歴史の中で生じる自我発達の能力を含む。しかし、Loevinger は、「古い用語の新しい使用を提唱するが、ちょっと独断的な再定義を提唱」(Loevinger, 1976, p. 1) し、統合の働きを重視する立場をとり、自我の認知的側面を重視し、個人が自己の住む世界や経験を意味づけ、目標を追求するといった能動的・主体的営みの中に自我の本質を置いた。Loevinger にとって、自我は、自分や世界を意味づける枠組み、即ち「準拠枠 (frame of reference)」を意味する。Loevinger の立場は、自我を特定の構造と見なすものである。この意味では児童心理学の中で用いられ

日本女子体育大学 (助手)

る「社会化」という語にも近いし、道徳発達、特性の構造、認知発達といった用語のもとに議論されてきたこととも類似している。

Loevinger の「自我」の概念は、精神分析学と認知的理論の統合を目指していて、Adler, Sullivan, Kohlberg, Erikson らの理論に多くの示唆を受けている。特に、Piaget や Werner の認知発達理論の概念からの影響はかなり強く、基本的に、Loevinger は、認知発達の考え方をとっている。Blasi (1976) によれば、認知は、全体として、人間発達の土台である。なぜなら、認知法則は、最も広範で最も包括的な構造を構成するからである。Loevinger による「自我」も、様々な認知や経験を統合し、そこに一貫性や意味を見出そうとすることによって「構造」を有するものであり、「自我発達」とは、認知や感情の分化にともなって、個々の認知や経験を統合する規則が変化し、発展していく過程であると考えられている。

しかし、自我発達理論は認知発達理論の考え方を取り入れているが、相違点もある。それは価値を含んでいることである。これは、Piaget も検討している道徳的判断の問題を考える際にも同じ問題に突き当たる。

Table 1 各々の自我発達段階の特徴 (Loevinger, 1976, 1996)

水準	コード	衝動の統制	対人関係モード	意識的とらわれ	認知スタイル
衝動的	E2(I-2)	衝動的	自己中心的, 依存的	身体感情	ステレオタイプの, 概念的混乱
自己保護的	E3(Delta)	日和見主義	操作的, 用心深い	「苦勞」, 統制	高望み
自己保護同調的 (Delta/3)		単純全体の規則への服従と同調	用心深い, 操作的, 搾取的	伝統的性役割の具体的側面	概念的単純性, ステレオタイプ
同調的	E4(I-3)	規則の尊重	協同的, 誠実な	外観, 行動	概念的単純性, 決まり文句
自己意識的	E5(I-3/4)	合法的な例外	援助的, 自己意識的	感情, 問題, 適応	多面性
良心的	E6(I-4)	自己評価的基準, 自己批判	激しい, 責任がある	動機, 特性, 達成	概念的複雑性, パターン化の考え
個人的	E7(I-4/5)	寛大な	相互的	個別性, 発達, 役割	過程と結果の区別
自律的	E8(I-5)	葛藤に対する対処	相互依存	自己成就, 心理的原因	概念的複雑性の増加, 広範
統合的	E9(I-6)	内的葛藤の再調停	心に抱く個別性	同一性	見通し, 曖昧さへの耐性

注1. コードにおけるE水準は, Hy & Loevinger(1996) によるものである。自己保護同調的水準は, E水準に含まれていない。

注2. 本表は, 佐々木(1980)、宮下・上地(1981)などを参考に作成した。

認知は, 決定, 思考, 価値の法則を提供しない(Blasi, 1976). この点に関して, Loevinger の理論は, パーソナリティ理論に近い。自我発達は, パーソナリティにおける「主たる特性」つまり, 意味づけを伴い, パーソナリティの全体的体系が構成される, より特異な特性を供給する枠組みとして示される。

パーソナリティについて, Loevinger は, 里程標 (milestone) と極性 (polar) という 2 つの尺度の違いを指摘している。里程標は, ある年齢水準まで増大していき, ピークに達し, そこを過ぎると逆に減少していくというような現れ方をする。多くの研究では, いくつかの特性を取り上げ, その量的な問題, つまり極性に注目しているが, Loevinger は, パーソナリティ特性がもっと質的に変化していくものと捉えている。例えば, Hoppe & Loevinger (1977) は, 自我発達と同調性の間には, 曲線の関係があることを検討している。自分自身を社会的に望ましいとする傾向は同調的段階の特徴であると考えられるが, この特徴を極性の側面として把握しようとする社会的望ましさの尺度では, 同調的段階より低い段階の非同調性と, 同調的段階より高い段階の自己批判などの傾向が混合されてしまうことになる。

この Loevinger の自我発達理論は, パーソナリティの様々な特性に連続的な発達段階を想定し, パーソナリティに見られる個人差の要因をその到達段階の相違としてみる一連の発達理論の 1 つとして提出されたもので, 個々の特徴については特に目新しいものはない。今まで人格心理学や臨床心理学において重視されてきたものを自我発達の枠組みの中に導入したところにその独自性があるのである。言ってみれば, 認知領域とパーソナリティ領域の橋渡し的な特徴があると言える

だろう。

Loevinger は, 「自我発達」を人間の発達の 4 領域(身体的発達, 知的発達, 心理・性的発達, 自我発達)の 1 つとして捉え, それらとの関係を認めた上で, 概念的には区別している。彼女は, 自我の発達を, ①衝動の統制, ②道德性の発達, ③中心的関心, 意識的とらわれ, ④認知様式から記述を行った (Table 1)¹。これらの次元は別々の次元を示すものではなく, 自我というただ 1 つの次元が存在する。言い換えれば, これらの次元は, 単一の一致した過程の 4 つの面を示している。よって, これらを独立に検討することは, 自我発達理論においてはあまり意味のないことである。

1.2 自我発達段階の記述

Loevinger (1976) は, 7 つの段階と 3 つの過渡的段階の計 10 段階を想定している。1996 年のマニュアル改訂時に, 過渡的段階という考え方を廃し, それを独立した段階として位置づけし直している。それと共に, コード名をそれまでの I から E に変更し, 順序尺度的な扱いにした (Table 1)²。

この段階は, 年齢とは独立に定義されていて, どの年齢の者がどの段階に位置づくというような考え方はしない。Loevinger が記述しようとするのは, どの年齢でも各段階の個人が共通して持つものである。各段階の平均年齢を問うことは, ここでは無意味なことであり, むしろ, 年齢を超えた個々の人間の発達を問題にし, それぞれの人間は, これらの段階のいずれかに留まることによって, そこに固有の性格を形成すると Loevinger は考えている。つまり, 個人差を含む発達の連続体を描写しながら, 類型論でもあるのだ。

1.3 マニュアルの構成から改訂へ

Loevinger は、自我発達の測定という側面に重点を置いた。このことは、この理論の突出した点であると思われる。自我発達を測定する際、一般的に、全36項目からなる WUSCT (Washington University Sentence Completion Test) と呼ばれる文章完成法を用いる。SCT が、自我発達段階測定のための唯一の方法ではないとされながらも、この理論では、理論と SCT の結びつきはかなり強固なものである。SCT の特徴は、一般に、①反応選択の自由さが被験者に与えられること、②深層というより意識の水準での被験者の特性を知ることができること、③実施が簡便で、集団実施ができること、といった点である(佐々木, 1981)。言い替えば、投影的手法でありながら、実施が比較的容易であるところにその利点があるといえるだろう。Loevinger は、特に①の特徴を重視し、SCT を採用している。それらは、自己評価、関心や悩み、良心のあり方、良心に対する評価や両親との関係、他者との関係、性に対する態度、職業や教育に関する評価などが投影的に表出するよう工夫されたものである。36という項目数は、他の類似の測度での項目数(30~40)、また被験者が1回に実施する上でそれほど苦痛とはならない量を考慮した上で、決定された。現在まで、様々なバージョンが作成されてきている。その中で、マニュアルが公刊されたのは、女性用の Form 9-62 と呼ばれるものであった (Table 2)。

自我発達段階を評定するためのマニュアル (Loevinger & Wessler, 1970; Loevinger, Wessler, & Redmore, 1970) は、各々の SCT に対する反応を1項目ごとに評定するためのものである。1000人以上の対象者による SCT の反応をもとに、各項目の各段階の特徴の記述、各項目の各段階に置かれる具体的な分類の説明、反応例からなっている。このマニュアルは、理論的検討のためのものではなく、実際の被験者の反応を中心に構成されている。

この1970年に出版されたマニュアルは、その副題にもある通り、マニュアルを構成するための対象者は全て女性であった。そのため、SCT の項目も、女性がより投影しやすいものがいくつか含まれていた(例えば、A pregnant woman)。よって、男性の SCT を評定する場合には段階の特徴の記述から類推するしかなかった。

以上のような経過をたどり、Form81 (Table 2) に対する男女共通のマニュアルが1996年に改訂された。

新しいマニュアルでは、前述の例のような項目は除かれ、項目の性別が男女で違うものなどは存在するが、男女で比較的対応した項目が用いられている。

Loevinger, Hy, & Bobbitt (1998) によれば、新旧のマニュアルの間にはいくつかの違いがある。第1に、テーマの使用である。テーマは評定者が評定しやすいように設けられたが、完全に成功してはいない。反応は多様なので、2つ以上のテーマを含むような反応にはうまく対応しないことがある。

第2の違いは、新マニュアルが少々簡略化されていることである。それは、評定者にとってより評定しやすいよう考慮されている。旧マニュアルでのわかりやすくするために何か冗長にも思える例の使用は、評定のトレーニングに役立ち、引き出された分布の現実性を読者に確信させる。しかし、ここで用いられる自我発達の概念は、今や多くの著書や論文で詳述されているので、予防線を張る必要はほとんどなくなった。

第3の変化は、「宣伝文 blurbs」という項目に対する導入節の短縮である。各項目の別々の水準に対する宣伝文も省略されている。

第4の違いとして、旧マニュアルでは、書かれたものをできるだけ精確に再現するよう慎重に転写され、スペリング、句読点、そして文法などの誤り全てを含んだ。新マニュアルでは、様々な研究者によって収集されたプロトコルを整理したことにより、そのような保証はない。

2. 英語圏以外の文化への適用

2.1 英語以外への SCT の翻訳と研究³

Hy (1998) は、翻訳の手続き上で考慮すべき注意点を整理している。翻訳してテストを用いることは、その言語の特徴の影響を受けざるをえない。Hy (1998) は、理想的な翻訳された項目として、①どんな教育背景を持った人でもある程度理解可能であること、②項目の意味がある程度限定されるとともに、曖昧さも持ち合わせていること、③元々の項目と比較して、評定が高すぎたり低すぎたりしないことを挙げている。

現在、Loevinger による WUSCT は、少なくとも11の言語に翻訳されて、検討されている。

Lasker (1978) は、アンチル列島の中の最大の島 Curaçao で実施するために、オランダ語と Papiamentu (オランダ語から派生した地域言語) に翻訳した。彼は、達成動機付けが低いパターンと Loevin-

Table 2 WUSCT の語幹の対応

Form9-02	Form8-1
1 家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
2 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
3 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
4 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
5 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
6 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
7 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
8 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
9 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
10 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
11 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
12 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
13 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
14 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
15 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
16 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
17 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
18 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
19 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
20 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
21 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
22 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
23 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
24 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
25 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
26 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
27 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
28 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
29 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
30 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
31 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
32 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
33 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
34 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
35 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)
36 家族が家族(1981)	大野(1989)中・高(学生版)

ger の前同調的水準の間の類似性を見出している。

Dhruvarajan (1981) は、インドの農村の46名の女性のサンプルで、カーストによる差異を研究するために、自我発達との関係で文化的宗教的価値の役割を検討した。彼女は、その地域の言語である Kanada で、WUSCT の口頭提示を用いた。46人の反応者の間で、後同調的自我水準の幾つかの例を報告した。女性が自分の「自己」に置く価値は、カースト地位、婚姻関係、子どもの性別で非常に異なった。

Paul (1979, 1980) は、ケベックでカウンセリング活動に参加を増やす目的で、8週間の訓練プログラムに参加していた看護婦32名に対し、WUSCT のフランス語訳を行った。自我水準は訓練の直後に査定されたが、有意な変化はなかった。WUSCT のフランス語版への反応は、フランス語の反応を英語のマニュアルを用いてバイリンガルの評定者によって評定した結果、信頼性も認められた。Limoges (1980) は、モンリオールで、32名の高校生で行われた訓練研究でフランス語版 WUSCT を用いた。学生の半分は、心理学関連の半期のコースに参加していた。実験群の学生は、プレテストからポストテストで自我発達の有意な増加を示したが、Professional Development Inventory (PDI) スコアとは相関がなかった。

Costa and Campos (1987) は、ポルトガル語を用いた。被験者は、18～23歳の250名の男女であった。被験者全員は、法学、工学、経済学、人文科学における研究の2年目にあった。一般に、女性は、男性より高い自我水準に評定された。研究の領域の主効果はなかったが、性別と研究領域の交互作用が存在した。工学において、男性は女性より高く評価された。男性で、法学と工学の男性は、最高スコアを得、経済学と人文科学の学生は最低に評定された。

Kapfhammer ら (1993) は、若い成人の精神病群 (17～26歳；N=139) と健常群 (17～26歳；N=100) を比較した。精神病群は、自我発達に関して有意に低かった。精神病群の中で、病種、自己概念、適応の成功・失敗に対して関連が見られたが、スコアリングマニュアルの適切性も記述されていない。

Snarey and Blasi (1980) は、自我水準とキブツシステムでの様々な水準についての仮説を検討するために、ヘブライ語に WUSCT を翻訳した。自己保護的水準の者が、若者でさえも非常に少ないということを報告した。キブツの価値が成人としてこの水準にある個人をほとんど生み出さないように働き、あるいはキブ

ツでの生活が自己保護的スタンスを非常に低く尊重し、より文化的に受容可能な回答を奨励するのに働くことが示唆された。Zlotogorski (1985) は、大虐殺の生存者の73名の成人の子どもの特徴を検討するために、ヘブライ語で WUSCT を実施したが、自我発達の差異によって測定されるような症候群は見られなかった。

Hy (1986) は、バイリンガルの難民サンプルで、英語とベトナム語半々で WUSCT を実施することによって、言語の影響を検討した。反応は、ベトナム語・英語の反応を英語のマニュアルを用いて、バイリンガルによって評定された。信頼性は、ベトナム語の反応の英訳に反応した英語を話す評定者で確認された。信頼性は、ベトナム語と英語の反応は非常に類似していた。自我水準は、言語的流暢性に関連した。個人が1つの言語で実質上流暢なとき、自我水準は、好ましい言語で実施した項目で高かった。相対的に、ベトナム語が流暢でない被験者は、英語の項目でよりもベトナム語での項目で反応を省略した。Hy の研究は、WUSCT 研究における言語上の焦点に加えて、異文化差を研究する差異の複雑さの大きさを例証している。

これらの研究全てが文化の違いに注目しているわけではない。しかし、他の言語への翻訳は、Loevinger の理論を拡張し、より強固なものにし、その普遍性を確認することにつながると思われる。

3. 日本での研究

3.1 日本への導入

日本において WUSCT を最初に用いたのは、Kusatsu (1977, 1978) であった。その後、30年近くの間、学会発表を含めると30近くの研究が報告されている。

Loevinger の自我発達理論を概観したものとしては、佐々木 (1980)、宮下・上地 (1981)、荒木 (1992) がある。佐々木 (1981) は、自我発達理論の概要を示し、自我発達測定手法を解説し、それに基づく実証的な研究を整理している。つまり、その当時の研究動向をかなり広汎に報告している。

宮下・上地 (1981a) は、日本へ Loevinger の自我発達理論を導入するに当たって、理論的検討、信頼性・妥当性の問題を概観し、SCT およびマニュアルを邦訳し、日本人青年に適用している。その結果、日本および日本語でも Loevinger が意図したような SCT の利点、即ち、広範囲の反応を引き出すことができ、評定

者間の評定の信頼性も保証されることを示している。

また、荒木 (1992) は、道徳性心理学に関する編集書の中で、Loevinger の理論を紹介し、日本におけるいくつかの研究を紹介している。

3.2 項目の作成

SCT は、特に言語に敏感である。翻訳がどんなに慎重であっても、翻訳された項目は、オリジナルとは異なるであろう。特に、日本語は、英語とあらゆることが異なると思われる。例えば、日本語と英語とでは語順が違う。項目によっては、自然な日本語になりにくいものがある (Table 2)。このことに関して、渡部・山本 (1988, 1989) は、児童に不適当と考えられた 3 項目 (例えば、Form 9-62 の項目 33 のような性に関する項目) を削除し、佐々木 (1981b, c)、宮下 (1981) を参考にし、予想される反応に極端な偏りのない範囲において、できる限り反応の形式を限定するために、項目の空欄の後ろに語尾をつけるという形式にしている。さらに、言語のニュアンスを失わない範囲で、できるだけ平易で自然な日本語を用いて表現するために、表現内容の変更を行っている。

また、日本語では、英語とのニュアンスが対応しないことがある。例えば、いくつかの項目で見られる“he”や“she”を日本語で「彼」「彼女」と翻訳すると、本来とまた別のニュアンスが生じる可能性が生じる。そのことを配慮して、大野 (1993) は、「ある女の人」とするなど工夫している。

Table 2 に、日本で用いられてきた WUSCT の項目を整理した。日本語で実施されたもののうち、宮下・上地 (1981) のものが Form 9-62 に最も忠実である。宮下・小林・上地・竹内 (1981)、宮下・上地 (1983, 1984) も同様のものを用いている。加藤 (1980a, b) には具体的な翻訳法の記述がないが、Form 9-62 を翻訳して用いている。

佐々木は、マニュアル (Loevinger et al., 1970) に記載された 6 種類の SCT から自己像、両親像、関心や懸念、対人関係などの重要な側面を引き出しやすいと思われるものを選択している。栃尾・秋葉 (1988)、栃尾・花田 (1991)、栃尾 (1994) は、佐々木 (1981a, c) のものをそのまま用いている。

大野 (1993) は、日本語版 WUSCT を作成するに当たって、日本における先行研究を参考にしながら、オリジナルに立ち返り、翻訳を試みている。基本的には Form 9-62 を参考とし、より若い対象者にも適用可能

な WUSCT の項目 (Form 2-77) も参照しながら、まず中学生・高校生女子版を作成した。そこから、項目によっては主語を変えることによって、中学生・高校生男子版を作成した。さらに、小学生版として、言葉のニュアンスを考慮した上で、平易な言葉に訳している (例えば、中・高生版で「規則は」、小学生版で「きまりは」)。

Loevinger (1976) によれば、WUSCT の項目は絶対的なものではなく、どの項目が何を測定するのかという制限もない。従って、項目に関しては、それほど制約がないといっていだろう。翻訳するのに 36 の短い項目のみだけなので、元々のニュアンスを表現することは困難である。よって、翻訳される限りオリジナルとは別のものと割り切り、Loevinger の自我発達段階の概念に従って、その言語での項目を作成し、反応を整理していくのが最も良いのではないだろうか。

また、日本では、36 項目で実施されたものが少ない。加藤 (1980a, b)、宮下ら (1981)、宮下・上地 (1981 他)、大野 (1993, 1997 他) のもの以外は、12 項目、27 項目、30 項目など少ない項目で行われている。確かに、反応者の負担や、同時に別の調査を行う場合には妥当なかもしれないが、信頼性を考慮すると、36 項目での実施が望ましいと思われる。

3.3 マニュアルの構成とその信頼性

日本において、マニュアルは公刊されていない。英語以外のマニュアル構成には 2 つの方法がある。1 つは、日本語の反応から独自にマニュアルを構成する方法である。佐々木 (1981b) は、中学生から大学院生・勤労青年に至る 370 名の女子からマニュアルを作成している。佐々木 (1981c) は、さらに、青年男子の反応からもマニュアル作成を試み、男女共通のマニュアルの可能性、全ての段階を含むマニュアルの必要性を指摘している。これに関しては、Hy & Loevinger (1996) でクリアされた。渡部・山本 (1988, 1989) は、女性版マニュアルを作成し、それから男性版マニュアルを作成するという手順を踏んでいる。

2 つめは、オリジナルのマニュアルを翻訳して用いる方法である。加藤 (1980a, b) や大野 (1993a 他) は、オリジナルのマニュアルを日本語に訳し、それに基づいて評定を行うというやり方をしている。

評定の信頼性に関して、Kusatsu (1977a) の研究では、WUSCT 反応は、最初に Loevinger ら (1970) の英語マニュアルで評定された。内的一貫性は、U.S. サ

ンプルで報告されたものと同様であった。宮下・上地 (1981, 1982, 1983a) は、評定の妥当性・信頼性の検討を行っている。2名の評定者間の採点の一致度、 α 係数などを検討し、項目別では0.56~0.86、個人の総合段階 (TPR)⁴では0.75の値を算出している。内的整合性に関しても.717という値を得ている。佐々木 (1981b) は、2人の評定者がマニュアルに基づいて評定した一致度を検討している。項目ごとの各段階への評定への一致度は、64%から91%であり、TPRの一致度は96%であったと報告している。

渡部・山本 (1988) は、彼らが作成した WY-SCT27 項目の自我発達段階に対して、小学5年生から成人に渡る612名分のデータを主因子法による因子分析を行ったところ、第2因子の固有値・寄与率が第1因子のものとはかなり隔たりがあったことを示している。大野 (1993b) も、小学5年生から高校3年生男女799名のデータについて、36項目の自我発達段階に得点を与え、主因子法による因子分析を行い、同様の結果を得ている。このことは、日本語による SCT も、自我という1次元のものを測定していて、日本語への WUSCT の翻訳、その評定に関しても信頼性が得られたと考えられる。

いずれにしても、マニュアルが改訂されたこともあり、新しい項目・マニュアルでの研究が今後の課題であろう。そして、オリジナルのマニュアルの作成方法から考えても、最終的には日本語による日本人の反応例に基づいたマニュアルを作成する必要があるだろう。なぜなら、日本独自の反応の可能性があるからである。

3.4 日本における反応の特徴

日本における反応の特徴として、Kusatsu (1977) は、他者を常に意識した反応 (Incessant awareness of others)、社会的役割の自然主義的概念 (当然と思われる社会的役割) (naturalistic conception of social rolesあるいは social rules taken for granted)、自分に対する謙遜 (humiliation of ego) を挙げた。佐々木 (1981a) は、成人男子を対象とした研究で、反応の特徴として、自己に対する否定的表現、親和的対人関係・社会、受容性を挙げている。これは、広くいえば、文化差ということもできるが、翻訳の差異によるニュアンスの違いによって生じた可能性も否定できない。これらの反応の特徴が被験者全ての反応ではないし、統計的な数値が示されているわけでもない。その母集団、

実施項目数の少なさから考えると、ほとんどの反応はマニュアルの記述の中に収まると思われる。しかし、Kusatsu (1977) や佐々木 (1981a) の指摘のように、英語での反応にはない日本語独自の反応も存在するのも事実である。文化差か翻訳の差かという問題は分割できない問題なのかもしれない。

3.5 発達差と性差

発達の検討は、段階の順序性の問題とも関係が深く、自我発達理論の妥当性を検討することにもつながる問題である。もともと、Loevinger は、成人の自我発達を年齢とは独立のものとして捉えていた。事実、成人を対象とした研究では、自我発達と年齢の関係が見られないという報告が多い。例えば、Lasker (1977) は、自我発達と年齢の関係が見られなかったという (Snarey & Blasi, 1980)。Kusatsu (1977) の研究でも、日本の成人男子295人に12項目の SCT を行なった結果、自我発達と年齢の相関は無視できるものであった。佐々木 (1981a) は、成人男子30歳から59歳を対象に、12項目によって自我発達段階を検討している。ここでも、年齢による発達差は特に見られていない。

それに対して、青年を対象とした研究では、年齢差、もしくは学年差が報告されている。アメリカの青年を対象とした研究では、Redmore & Loevinger (1979) が、8つの縦断研究を報告している。その中で、6-12年生間、8-12年生間など、ほとんどの対象で、自我発達段階の上昇が見られたという。また、Sullivanら (1970) は、12歳、14歳、17歳の年齢の男女合計120人を対象として、自我発達と年齢の関係を検討している。ここでは、自我発達と年齢の相関は0.65であり、年齢が高くなると共に、自我発達段階も上昇するという傾向が見られた。

日本ではどうだろう。佐々木 (1981b) は、15~23歳の年齢の女子合計100人を被験者として30項目の SCT を行った結果、年齢が高くなると共に段階が上昇することを確かめている。自己保護同調的段階以下の者は、年齢と共に減少し、同調的段階の者はどの年齢でもかなり多いが、20歳以上で多少減少する傾向があった。自己意識の段階から個人的段階までの者は、年齢と共に増加する傾向が見られた。佐々木 (1981c) は、青年男子についても、14~23歳計292名を対象に検討を行っている。やはり、ここでも、年齢が上がるとともに、自我発達段階が上昇している傾向が見られた。宮下・上地 (1981a, b, 1983, 1984) も、高校生から大学生

の女子208名を対象に、WUSCTの項目ごとに青年女子による反応に年齢差があるかどうかを検討している(宮下・上地, 1983)。すると、SCTの36項目中4項目を除いて、年齢の上昇とともに自我発達段階の上昇が見られた。宮下・上地(1981a)は、Loevinger & Wessler(1970)の結果と比較して、総合評定(TPR)の結果をみると、宮下らの結果の方が低く評定された者が多かった。その要因として、短大生が対象だったこと、時代的要因、社会文化的状況の相違、現代の青年期延長の風潮を考察している。

大野(1993a, 1997他)は、小学校5年生から高校3年生799名を対象とし、衝動的段階から自己意識的段階の5つの段階が見られたと報告している。学年差を見ると、小学校6年生から高校1年生の間の各学年全てで有意差があった。学年が高くなるほど、衝動的段階の者が減少し、高い段階の者が増加する傾向があった。

加藤(1981)は、中学生78名、高校生80名、少年鑑別所・少年院収容中の49名の女子を対象に検討した結果、中学生から高校生にかけて、自我発達段階の上昇が見られることを報告している。

これらの研究に共通しているのは、対象者が児童、青年の場合には年齢との関連が見られるが、成人を対象者とした場合には、見られないということである。よって、青年以前には年齢が上がると共に発達段階が上昇していくが、成人してからのその個人の自我発達段階は、パーソナリティのタイプとして固定してしまうのではないかと考えられる。

前述の通り、この理論ではもともと自我発達が年齢と独立に捉えられているが、それはLoevingerが理論を形成した初期において成人女性を対象としていたためであった。その後、対象が青年期に広げられるにつれて、年齢についての問題に注目が集まってきた。一般に青年期と考えられている時期には、日本においても、自我発達段階が上昇すると考えられる。これは、Loevingerの提唱した自我発達段階の順序について、日本でも妥当性があるという意味で重要であろう。即ち、Loevingerの提唱した自我発達段階の順序に関しては、文化に関係なく、普遍的なものとして捉えることができるのではないだろうか。

また、低い年齢での実施が何歳から可能であるのか検討する必要がある。子どもを対象にWUSCTを実施する場合、例えば、性に関する項目など、WUSCTの項目によっては、回答しにくい項目もある。これらを考慮して、新たに、SCT-Yという子どもや青年により

適切だと思われる項目も開発されている(Westenber, Treffers, & Drews, 1998)。

さらに、青年を対象とした研究では、性差も報告されている。Cohn(1991)が134のWUSCTを用いた研究を対象に行なったメタ分析によると、自我発達における性差は、成人を対象とした研究においてよりも、青年を対象とした研究において大きいという結果であった。6年生においては、有意な性差は見られなかったが、中学生、高校生では、女子は男子よりも有意に高く評定されていた。この性差は、研究間で比較的安定していて、青年女子の平均的な自我水準は、青年男子の73%の自我水準よりも高かった。この性差は、大学生間で劇的に縮小し、成人になると消失する傾向が見られた。また、青年期前期の大多数は、自己保護的段階から同調的段階の間に位置していて、女子は男子よりも少なくとも1段階高く評定されている傾向があった。

この傾向は、日本でも報告されている。佐々木(1981c)は、佐々木(1981b)と比較して、男子青年の方が、女子青年より低い段階の者が多いことを示唆した。

渡部・山本(1988)は、成人群の母集団の構成が男女で異なり、一概に言えないとしながらも、女性については、大学生までは年齢の推移に伴って、より高い自我段階の比率が増加し、成人群では自我発達段階の平均が低下する傾向があった。男性に関しては、年齢に伴った自我発達段階の上昇が示された。

大野(1993a, b, c, 1995, 1997, 1999)は、同学年における男女差を見ると、中学生以上で有意差が存在し、どの学年においても、女子の方が自我発達段階の高い傾向があった。さらに、男女別に学年差を見ると、男子では中学1年生から高校2年生の間で各学年間の差があったのに対して、女子では6年生から高校1年生の間で有意差が存在した。このことは、女子の方が男子より自我発達段階が早く高くなり、早く安定する傾向があると考えられる。このことについて、この研究における最高段階である自己意識的段階の初発学年に注目すると、男子では高校1年以上でしか現れないのに対して、女子では中学2年生からすでに存在している。学年別性別に合計得点を見ると、男女とも学年が上昇するにつれて得点が増加する傾向が見られ、女子の方が男子より合計得点が高い傾向が見られた。

性差に関しては、日本においては1つの研究の中で検討されたものが少ないが、男子より女子の方で自我発達段階が高いという性差は、何を意味するのであ

うか。一般的に、女子のほうが身体発達や性的発達が早いと言われる。Loevinger (1976) は、人間の発達を身体的発達、知的発達、心理・性的発達、自我発達の4つの領域から説明し、これらが互いに強い影響を及ぼしあい発達すると述べている。このことからすると、女子のほうが青年期の間で高い自我発達段階にあるということは妥当な結果であろう。

3.6 その他の応用的研究

Kusatsu (1977, 1978) は、松本で19の職業から体系的に引き出された295名の男性を対象とし、WUSCTの12項目版、態度、価値、対人指向性、政治的指向性、生活満足の尺度などを検討している。従来の日本の「文化的アイデンティティ」についての過剰単純化を否定する発見を示した。この研究は、パーソナリティの社会学的研究と言える。

宮下・小林・上地・竹内 (1981)、宮下・上地 (1983, 1984) は、自我発達と疎外感との関係を検討している。その結果、疎外感の高い者は自我発達が低く、自我発達段階の高い者は、低い者に比べて、自己実現的傾向が強いということが一部認められ、疎外感を受容する程度の高い者は、低い者に比べて自我発達段階や自己実現の程度が高いという傾向が見られた。

加藤 (1981a, 1981b) は、自我発達段階ごとに、Self-Esteem と社会測定的地位との関係を検討し、中学1年生で同調的段階の特異性を指摘している。即ち、同調的段階で仲間とのつながりを重視しているということを示す結果であった。自我発達と知能との関係も検討していて、高校2年生の良心的段階の者を除き、有意な関係は見られなかったことから、知能と自我発達段階とは別の次元であることを明らかにしている。

渡部・山本 (1988) は、WY-SCT と自我機能調査票 (EFI) で測定される自我機能の関係から、WY-SCT で測定される自我発達段階が、段階を追って徐々に変化してゆく、全体としてのパーソナリティの発達の指標として、位置づけられる可能性を示唆している。渡部・山本 (1989) は、20答法との関係で、自我発達段階の側面である認知様式と意識的とらわれに関する各々の自我発達段階の特徴が一致しているとしている。彼らはさらに、自我発達段階の「衝動統制・性格発達」「対人関係様式」という側面の特徴が、他のパーソナリティ検査によって裏付けられることも検討している。具体的には、WY-SCT と「エリクソン心理社会的調査票」「自我機能調査票」「矢田部・ギルフォード性格検査」

との関係も自然発達段階に対応したものであった。

大野 (1993a, b, 1997) は、成人観・成長感との関連を検討している。自我発達段階の低い者は、大人との差異を身体的特徴などの即時的なことで捉えることが多く、高い者は、精神的特徴や社会的責任や自立というようなより客観的なこと、もしくは内的世界に焦点化する傾向が見られた。

4. 結 論

本研究は、Loevinger の自我発達理論を要約し、その測定の特徴を示した。さらに、英語圏以外での研究、日本での研究を取り上げた。その中で、残された問題がある。

第1に、自我が現実の場面でどのように機能しているかという点においては、あまり研究されていない。これらの点を考慮するために、特に、他者とコミュニケーションをとる場合に、どのように関係するかというような日常生活の中で検討することが必要だと思われる。大野ら (2000a, b) の研究などは、その1つの方向性を示していると言えるだろう。大野ら (2000a, b) は、中学生を対象に、友人同士のやりとりが個人の自我発達段階によって異なることを見出した。

第2に、何が自我発達の段階を上昇させるのかという問題がある。そのヒントとなるのが、適応との関係ではないかと思われる。加藤 (1981a, b) は、高校2年生と同年代の少年鑑別所・少年院に収容されている女子を比較したところ、後者の自我発達段階の平均が高校2年生より低いことを見出した。栃尾・秋葉 (1983)、栃尾・花田 (1991) は、高校生と非行行動のある女子青年を対象に、自我の発達と非行行動との関係を調査している。その結果、非行群の少年の方で低い段階に評定される者が多い傾向を見出した。

栃尾 (1994) は、精神科病院に入院している男性患者を対象に自我発達段階の様相を検討したところ、前同調的段階 (衝動的段階、自己保護的段階) に評定される者が多く、入院期間が長いほど低く評定される傾向を見出した。

自我発達と適応は、別の概念と考えられる。自我発達段階が高くても不適応は起こりうるし、低くても適応は可能である。これは、適応がその個人と環境との関係によって起こると考えれば説明が付くのではないだろうか。そして、個人の段階とその個人を取り囲む環境とが一致しなくなったとき、その環境に適応する

ために、個人の発達段階が上昇するのではないだろうか。青年期で自我発達段階が上昇する傾向が見られるのは、青年期が人生の他の時期よりも環境の変化が大きいためではないだろうか。

第3に、自我発達に文化は関係するののかという問題がある。文章完成法という形式で測定するので、その個人が使用する言語を通して、その個人が所属する文化の影響を受けやすいものであろう。しかし、これまでなされた研究から考えれば、反応に日本独自のものが見られたものの、その発達段階の順序性、青年期における発達傾向などは、諸外国で行われた研究と類似していると言ってよい。しかし、日本という文化の中で考えることは大きな意味を持っていると思われる。日本においてSCTを行い、データを積み重ねることは、日本語における標準化をも含めて、非常に重要な意味があると思われる。Macrae and Costa (1997)は、比較文化的研究によって、パーソナリティ特性の基本構造は普遍的であると報告している。このことから、日本においてLoevingerの自我発達理論を導入することが可能ではないかと思われる。Loevingerの考える自我発達という概念は、普遍的な概念と捉えていいのではないだろうか。

これらの問題は、日本に限定されるものではなく、自我発達理論全体に関わる問題である。Loevingerの自我発達理論を日本に適用するにあたって、様々な文脈でのデータを積み重ね、マニュアルの構成を考える必要があると思われる。そのことが、Loevingerの自我発達理論と方法論の精緻化につながることになるであろう。

文献

荒木紀幸 1992 自我発達理論 レヴィンガー 日本道徳性心理学研究会編著 道徳性心理学：道徳教育のための心理学 北大路書房。
Blasi, A. 1976 Personal responsibility and ego development. In R deCharms (Ed) Enhancing motivation: Change in the classroom. New York: Irvington.
Carlson, V. and Westenberg, P.M. 1998 Cross-cultural applications of the WUSCT. In Loevinger, J. (Ed) Technical foundations for measuring ego development: The Washington University Sentence Completion Test. Mahwah, NJ, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp.57-75.
Cohn, L.D. 1991 Sex differences in the course of personality development: Meta-analysis. Psychological Bulletin, 109, 252-266.

Holt, R.R. 1980 Loevinger's measure of ego development: Reliability and national norms for male and female short forms. Journal of Personality and Social Psychology, 39, 909-920.
Hoppe, C.F. & Loevinger, J. 1977 Ego development and conformity: A construct validity study of the Washington University Sentence Completion Test. Journal of Personality Assessment, 41, 5, 497-504.
Hy, L.X. 1998 Appendix F: How to use the SCT in translation. In Loevinger, J. (Ed) Technical foundations for measuring ego development: The Washington University Sentence Completion Test. Mahwah, NJ, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp.123-127.
Hy, L.X. & Loevinger, J. 1996 Measuring ego development. Mahwah, NJ, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
加藤康一 1981a 文章完成法による青年期人格発達研究: J. レヴィンジャーによる自我発達理論の妥当性の検討 愛知教育大学大学院教育学研究科学校教育専修修士論文要旨集, 1, 16-19.
加藤康一 1981b 文章完成法による青年期人格発達研究: J. Loevingerによる自我発達理論の妥当性の検討 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 416-417.
Kusatsu, O. 1977 Ego development and socio-cultural process in Japan (I) アジア大学経済学紀要, 3, 1, 41-109.
Kusatsu, O. 1978 Ego development and socio-cultural process in Japan (II) アジア大学経済学紀要, 3, 2, 74-128.
Loevinger, J. 1976 Ego Development: Conceptions and Theories. San Francisco: Jossey-Bass.
Loevinger, J., Hy, L.X., & Bobbitt, K. 1998 Revision of the scoring manual. In Loevinger, J. (Ed) Technical foundations for measuring ego development: The Washington University Sentence Completion Test. Mahwah, NJ, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp.19-24.
Loevinger, J. & Wessler, R. 1970 Measuring ego development 1: Scoring manual for women and girls. San Francisco: Jossey-Bass.
Loevinger, J., Wessler, R. & Redmore, C. 1970 Measuring ego development 2: Scoring manual for women and girls. San Francisco: Jossey-Bass.
宮下一博・上地雄一郎 1981 Loevingerの自我発達理論: 理論の概要とその測定法の我が国への導入 広島大学教育学部紀要第I部, 30, 225-235.
宮下一博・上地雄一郎 1983a Loevingerの自我発達理論: 信頼性と妥当性の検討(I) 広島大学教育学部紀要第I部, 31, 207-211.
宮下一博・上地雄一郎 1983b Loevingerの自我発達理論: 信頼性と妥当性の検討および疎外感との関係 日本

教育心理学会第25回総会発表論文集, 396-397.

宮下一博・上地雄一郎 1984 Loevingerの自我発達理論：信頼性と妥当性の検討(II)及び疎外感との関係 広島大学教育学部紀要第1部, 32, 183-187.

宮下一博・小林利宣・上地雄一郎・竹内珠美 1981 「疎外感」と自我の発達：Loevingerの自我発達理論を利用して 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 418-419.

大野和男 1993a 子どもの成人観についての発達の研究：小学生・中学生・高校生を対象とした文章完成法による検討 福島大学大学院修士論文(未公開).

大野和男 1993b Loevinger理論に基づいた文章完成法による自我発達段階の検討：小学生から高校生を対象とした発達の研究 現代行動科学会会報, 9, 12-22.

大野和男 1993c Loevinger理論に基づいた文章完成法による自我発達段階の検討：小学生から高校生を対象とした発達の研究 日本心理学会第57回総会発表論文集, 572.

大野和男 1995 子どもは自分の成長をどのように感じているのか：成長感とLoevingerの自我発達段階との関係の検討 日本発達心理学会第6回大会発表論文集, 85.

大野和男 1997 子どもは自分の成長をどのように感じているのか：Loevingerの自我発達段階と成長感との関係 心理学研究, 68, 95-102.

大野和男 1999 パーソナリティの発達：Loevingerの自我発達理論における検討 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 361.

大野和男・塚田みちる・若尾良徳・宇根本聡・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗香・須田治 2000a 思春期の感性と自我発達(1) 日本発達心理学会第11回大会発表論文集, 243.

大野和男・塚田みちる・若尾良徳・宇根本聡・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗香・須田治 2000b 思春期の感性と自我発達(3)：コミュニケーション場面におけるやりとり 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 332.

Redmore, C.D. & Loevinger, J. 1979 Ego development in adolescence: Longitudinal studies. *Journal of Personality Assessment*, 40, 607-616.

佐々木正宏 1980 Loevingerの自我発達理論：理論の概要とその測定法の我が国への導入 心理学評論, 23, 392-414.

佐々木正宏 1981a 成人男子の自我発達 東京大学教育学部教育相談室紀要, 4, 131-137.

佐々木正宏 1981b SCTによる女子青年の自我発達の測定 教育心理学研究, 29, 147-151.

佐々木正宏 1981c 青年男子の自我発達 東京大学教育学部紀要, 21, 183-191.

Snarey, J.R. & Blasi, J.R. 1980 Ego development among adult kibbutzniks: A cross-cultural application of Loevinger's theory. *Genetic Psychology Monographs*, 102, 117-157.

柄尾順子 精神症状と自我発達の関係：Loevingerの自我

発達理論に基づいて 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 508.

柄尾順子・秋葉英則 1983 J. Loevingerの自我発達理論の検討：女子非行青年のパーソナリティとの関係 大阪教育大学紀要, 37, 1, 17-27.

柄尾順子・花田知津子 1991 女子非行青年の自我発達水準の検討：Loevingerの自我発達理論に基づいて 教育心理学研究, 39, 324-331.

Westenberg, P.M. Philip D., Treffers, A. and Drewes, M. J. 1998 A new version of the WUSCT: The Sentence Completion Test for Children and Youths (SCT-Y). In Loevinger, J. (Ed) *Technical foundations for measuring ego development: The Washington University Sentence Completion Test*. Mahwah, NJ, USA: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. Pp.81-89.

渡辺雅之 1990 WY-SCT女性版の併存的妥当性の検討 滋賀大学教育学部紀要, 40, 87-95.

渡辺雅之・山本里花 1988 文章完成法による日本人の自我発達測定研究 滋賀大学教育学部紀要, 38, 51-64.

渡辺雅之・山本里花 1989 文章完成法による自我発達検査の作成：LoevingerのWUSCTの本案とその簡易化 教育心理学研究, 37, 286-292.

Zlotoigorski, Z. 1985 Offspring of concentration camp survivors: A study of levels ego functioning. *Israel Journal of Psychiatry and Related Sciences*, 22, 201-209.

注

1 1996年に改訂されたマニュアルは、自我発達段階を①衝動統制、②対人関係様式、③意識的とらわれの3つの側面から記述している。

2 以前は、主として段階をstage、過渡的段階をlevelという語で表すことが多かったが、1996年マニュアルでは、どちらもlevelという語が用いられるようになっている。しかし、特に区別されているわけではないようである。

3 本節の文献の多くは博士論文のため、文献が手に入りにくい。そこで、Carlson & Westenberg (1998)の記述から整理した。

4 この36項目それぞれの評定から、各個人発達水準として総合評定(TPR)を算出する。総合評定を算出する方法には様々な方法がある(最頻値を用いるもの、つまり、36項目の評定のうち、最も多かった段階をその個人の段階とするもの、平均値を用いるものなど)。その中で最もよく用いられているのは累積度数分布法と呼ばれるものである。本稿で特に断りのない場合は、この方法を用いているものとする。

(平成13年9月17日受付)
(平成13年12月20日受理)

